



報われる理系

画家、科学者、新聞記者、プロボクサー、子供の頃はいろいろななりたいたいものがありました。いま科学者の端くれとして大学に勤めているわけで、一応、夢の一つが叶ったことにはなります。しかし実際のところ、画家とボクサーの可能性はそれぞれ中学校と大学のとき才能の無さを自覚して、新聞記者への道は高校のとき英語が嫌いでも理系を選んだ時点で消えました。もちろん理系はずっと好きでしたが、冷静に振り返ると、最後まで私を見放さなかった職業が科学者だったような気がします。

若者の理系離れが危惧されていますが、一般には人はいかに進路を、職業を決めるのでしょうか。どちらかにしか適応できない典型的なタイプ、理系人間、文系人間がそれぞれ必ず20%ずつはいて（もちろんこの数字には根拠はありません）、恐らく彼らは選択を迷うことはありません。問題は残りの60%の人々（凡人層と呼びます）のほとんどが文系を選択している現状にあるように思えます。彼らを凡人と馬鹿にしてはいけません。スポーツと一緒に高い山を立てるには裾野の広さが必要なのです。しかし、この種の議論はもっぱら山の頂点付近にいる20%の理系人間によってなされているので、本質的で正しい提言であっても、社会の中核にいる20%の文系人間に、本当の意味で理解してもらっていないから社会が動かない。理系離れ対策を考えるには、凡人層のうちで最終的に文系を選んだ人にその理由を聞くと、ぐっと現実的な対策が浮き彫りになるのだと思います。じゃあ、文系を選んだ凡人とはいったいどこにいるのか？ 文系ですから『ぶんせき』の読者ではありません。我々とはほとんど接点がないのです。もちろん町を歩けばそこかしこにいるわけですが、唐突に理系離れ対策の提言を求めたところで変人扱いされるだけです。いわゆる silent majority の声を聞くのは大変なのです。冒頭で書いたように、私は60%の凡人層に属する人間ですが、それにもかかわらず理系を選んだ奇特な存在です。文系凡人に聴くのが一番よいのですが、せつかくの機会ですので理系凡人の提言に付き合ってください。結論から先に言うと、様々な層の人々から成る社会を動かすのに高尚なことを言っても効果は期待できません。つまるところすべての生物はタイムスパンの違いこそあれ、快樂に向かって行動する。『楽で報われる道』が選択されるのです。

告白すると、私が理科が好きだった理由は、こつこつと勉強する必要がないから。極端に言えば、幾つかの単純で美しい原理を理解してさえいれば、あとは問題を出されてから考えるだけ。こんなにらくちんな科目はありません。勉強の必要がないという同じ理由で現代国語も得意科目でした。このあたり、理系、文系どちらかにピシッと決められない、いかにも凡人的性格が出ています。対して、当時、外国の研究者とのコミュニケーションや英語で論文を書いて情報を世界に発信するなんていう具体的なモチベーションを持ってない高校生の私にとって、無数の単語をひたすら覚えるという絶望的なまでに終わりの見えない作業を要求する英語は対照的でした。

戦闘意欲すら湧かないのです。つまり、本来、理系は受験生にとって非常にコストパフォーマンス（点数/勉強時間）が高く、選択されるべき報われる科目なのです。多くの子供たちにこれをわかってもらうにはどうすればよいか。Aと問われたらB、Cと問われたらDというような二流学習塾がやっている細木数子風スバリ学習法だと、これはもう『英語』と区別が付きません。すぐに限界がきます。まずは数少ない原理・原則から演繹的に多くの事実を説明できることを示して科学の合理性を実感させることが重要です。これを何度か経験すると、子供は新しく見聞きした事実を自分の知っている数少ない知識をリンクさせて説明しようとする。知識が知恵に変わる瞬間です。たとえ間違っている、これが論理的らくちん思考の習慣付けの第一歩だと思います。もちろんこれは教師にある程度の能力を求めます。最近の調査によると、小学校教員の6割は理科が苦手とのこと。比較的低学年、すなわち小学校、中学校の教員として理系の修士、博士を積極的に採用する。それに見合った給与を支払う。雑用を減らす。これで理系離れは、ほんの少しだけ解消します。

決定打はやはり給与です。同じ学歴、同じ歳の銀行員が能力と関係なくほぼ倍の給与をもらうようでは、凡人層で理系を選ぶのは余程の変わり者です。この状態を放置して理系離れにストップがかかるはずはありません。マスを手にする場合には精神論には意味がなく、理系の平均給与が文系に並んで初めて同列の選択肢となるのです。この給与格差は第3次産業が発達した先進国に見られる共通の傾向ではありますが、資源の乏しい我が国においては独自の道を切り開く必要があります。しかし、これは社会全体の仕組みの大きなシフトを伴いますし、文系帝国が既得権益をそう簡単に手放すはずはありませんので、かなり難しいことです。草の根的な地道な活動により、理系の地位向上を図る必要があります。研究者による社会へのわかりやすい説明、成果の還元は必ずやらなければなりません。マスコミ、世論を味方に付ける必要があります。また、知的でスタイリッシュな科学者というイメージ戦略も有効です。理系作家の瀬名秀明、東野圭吾、またはマイケル・クライトンに髪ボサボサでない、KYでもない等身大のクールな科学者が活躍する本格的理系小説の脚本を書いてもらう。知的で美しい科学者を演じるのは松嶋菜々子、ニコール・キッドマンあたりがよいでしょう。

ここまで書いて、極端で矛盾だらけの仮定を重ねた割には、結局月並みな結論になっていることに気づきました。これこそ凡人の証左です。ちなみに、数年前に私の2人の子供たちに将来なりたいたいものを尋ねたことがあります。上の子は、女優、弁護士、占い師、いずれも言葉を弄する人たち。下の子は機関車トーマス、理系云々以前に人間ですらありません。今回は知的で美しい科学者、吉田裕美先生（京都工芸繊維大学）にお願いしました。

〔熊本大学大学院自然科学研究科 井原敏博〕